慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの「道徳情操論」に就て
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.7 (1923. 7) ,p.1045(71)- 1075(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19230701-0071
Abstract	
Notes	アダム・スミス生誕二百年記念号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

又は貨銀干渉の政策論に到達せざりしが如き即ち是なり。

要するに「スミス」の所説には幾多の矛盾あり撞着あり、不徹底もあれば未熟なる點もあり。其結果は後世をして敵も味方も同時に氏を宗とせるが如き奇觀を呈するに至らしめたるものあり(Held; Sociale Geschichte Englands, S. 158)、然りと雖も是れ固と碧玉の微瑕のみ。斯學研究の上に於て周到なる注意を以て廣く多面的の觀察を試み、時代思潮の上に超然として一主義一理想に捕はるゝことなく、洽ねく各種の思想を綜合して、社會全般の利益といふ大處高處より公正嚴明なる斷定を下さんと試みたる其學風は、永く後世の儀表たるを失はず。研究愈深くして其議論兎角偏狹に馳せんとするの傾ある最近の思想界に於て、「スミス」の追懷は又正に頂門の一針たるを失はざる可し。

アダム・スミスの『道德情操論』に就て

川合貞一

一

『國富論』なるものがアダム・スミスの名をして不朽ならしめたと同じく、『道德情操論』なるものがまた渠をして倫理學史上、重要な地位を占めるに至らしめたのである。が、然し『國富論』と『道德情操論』とは其の根本思想に於て一見全く相容れない所があるものゝやうに思はれる。と云ふのは、『國富論』なるものは主として利己の原理の上に打建てられてゐるのに反し、『道德情操論』なるものは同情の原理の上に打建てられてゐるからである。そこで、此の兩者が如何なる關係を爲してゐるかと云ふことが疑問とならざるを得ない。

所で、此の疑問に對してまづ第一に考へられるのは、アダム・スミスは、『道德情操論』に於ては、利己主義を以て倫理學の原理となすことに反對したけれども、後にな

つて其の説を變じ、利己主義を以て人間行爲の一般的原理となすに至つたのではあるまいかと云ふことである。これは『道德情操論』の現れたのが一千七百五十九年であり、『國富論』の現れたのが十七年後の一千七百七十六年である所からして自然に起り得べき考へではあるが、然し事實は此の推定を許さない。何故かと云ふと、アダム・スミスはグラスゴー大學の教授として實踐哲學の關聯せる課程の部分として倫理學、經濟學及び政治學を講じただけではなくして、最後の病中に在つて補を加へ『道德情操論』の第六版を出してゐるからである。して見ろと『國富論』と『道德情操論』とはアダム・スミスの心中に於ては何等矛盾する所なく並び存してゐたものと云はなければならない。

さりとて此の兩者の思想を以て、全然調和するものとも考へることが出來ない。これは倫理史家ヨードルが、一方は技術的行爲を其の研究の對象となし、今一方は道德的行爲を其の研究の對象としてゐるのであるから、アダム・スミスの經濟上の理論と渠の倫理説とは全然調和すると云ふ考は現實の事態並に渠の思惟に於ける統一に對して殆んど正鵠を得てゐない(註一)と云つてゐるのを以て其の當を得たものと云はなければならない。然らば此の兩者の關係をば如何に解したらばよからうか。

イングラムはこれに對してから考へてゐる。バックルの考へでは、スミスの『道德情操論』と『國富論』と云ふ二主著は、人間の性質を全體として取扱はうと云ふ一大企圖の相互に補足する部分である。而して前者は仁愛の感情を示し、後者は利己の情と呼ぶ所のものに關してゐる。いづれの部分に於ても考察せられた動機は反對の原理の干渉を少しも受けずして別々に働くものと考へられてゐる、と云ふのであるが、これは人を惑す無理な解釋である。アダム・スミスの大學課程の案に於ても、また『道德情操論』の結尾に於けるよく知られた章に於ても、渠がさう云ふ二部より成る企圖を考へてゐたと云ふ何等の徵候もない。『國富論』の目的は『道德情操論』のそれの如く心理的のものでは決してない。該書の目的は、社會的現象を示さうと云ふのであつて、個人の心的構成に於ける其の源泉を證明しようと云ふのでない(註二)と。實にイングラムが云つてゐる通り、アダム・スミスはバックルの解したやうに、人間を以て別々の動機によつて全く別々に行動する、いはゞ二重人格

的のものとやうに見たのではなくして、人間性の異れる方面を二主著に於て描寫したに止つてゐる。蓋し經濟的生活に於ては利己主義が比較的有力であることは、道德生活に於て同情の原理が效力を有するのと同じく事實である。アダム・スミスはかう云ふ事實を基礎として之を論じたのである。されば此の兩著を以て絶對的に相反してゐる根本思想を述べたものと考へるのは妥當の見であるとすることは出來ない。惟ふにアダム・スミスは『國富論』に於ても『道德情操論』に於て採つた、渠の倫理的社會的見地を全く棄てゝ了つたのではない。此の點に關して倫理史家ヨードルの採つた見解が恐らく最も其の當を得たものであると云ふことが出來やう。

ヨードルの述べてゐる意味はかうである。

利己主義なるものは人間に於ける有力な動機であり、而してそれが正當に成立する行爲の廣い範圍がある。人間と云ふものはもと〳〵自分の事は自分で注意するやうに出來てゐるし、而してそれが他人の手を假るよりも善く出來るのであるからして、さうするのが正當な事である。自分の健康に注意し、立身出世を圖り、富貴名譽を獲ようと云ふやうなことにはどうしても利己の活動が必要である、而してそれが、唯、許されてゐるばかりではなくして道德上無くてはならない事なのである。さう云ふ方向に働く所の利己なるものは、唯、銘々に取つて有利な結果を齎すだけではなくして、社會に取つてもさうなのである。それでアダム・スミスは利己を以て文明の眞の原動力であるとしてゐる。十分に自分の利害關係を知らず、自分自身に對する注意を等閑にすると云ふことは、正しく道德上の缺陷を表してゐるものである。が、利己なるものは人間に生れ付いてゐるものなのであるから、それに就てはあまり困難はない。が、人間は社會に於て同情の原理の力によつて好意と正義とに敎育されなければならない。人間は社會からして、他人の存在、幸福、名譽を顧慮して自分の自愛を制限することを學ぶのである。而して他人の存在、幸福、名譽を顧慮して制限せられた利己なるものは、常に一般の是認を受けるにきまつてゐるであらう。然るに自愛が其の度を超えて隣人を傷けるに至ると、最早公平な第三者の同感と是認とを受けることが出來なくなる。此の意味に於て、身體、財產、名譽侵害の保障たる正義なるものが、『道德情操論』によつて道德生活の

中心に置かれてゐる。而してそれが道德上の資格を有する利己の限界を示すのである。かう云ふ倫理上の見解は『國富論』に於ても決して棄てられたのではない。人間は其の經濟生活に於ては主として利己によつて指導せられるものであり、而して生產及び交換の範圍に於ける現象をばあらゆる個人的慾望の相互調節に還元すれば其の內的力を洞察することが出來ると云ふのが、アダム・スミスの經濟學の基礎とする所の方法的根本思想であつた。けれどもそれは『道德情操論』に於て述べられてゐる倫理上の思想と全然相反するものではない。何故かと云ふと、アダム・スミスの倫理上の思想に於てはある條件の下に於ける利己なるものが正當なものと認定されてゐたからである。それからまた經濟生活の力が其の自由な活動に委せられると、相互の調節と社會上無用なものの制限とによつて、一般的幸福とあらゆる利害關係の調和に導くに相違ないと云ふ見解の痕跡が、既にアダム・スミスに存してゐるのを見るのである。而して渠が經濟範圍に於ける國家の干涉を排し、獨裁的官僚からの人民の保護と指導とを斥け、自治と自己責任とを主張したのは、唯、かう云ふ思想によるのである。それから自然の創造者によつて一定の計劃に從つて其の幸福の爲に按排された人間の衝動系統と云ふものには、唯、利己が屬してゐるだけではなくして、また『道德情操論』が道德生活を引出して來た所の同情衝動と報償衝動とがこれに屬してゐる。利己が事實であるが如く、さう云ふ倫理的衝動も事實であるのであるが、神の計劃になる一般的經濟に於てもまたこれが勘定に入つてゐる。人間は統一である。從つて人間は經濟生活に於て一般の場合に於けるとは別人であることは出來ない。人間の經濟からして同情、同感を斥けて了ひ、其の根本力を貧弱ならしめて而もなほ同樣の結果を豫期しようと云ふやうな考へは、アダム・スミスには決して起らなかつた（註、三）と

かう云ふやうに見て始めてアダム・スミスの根本思想が理解されるやうに思はれる。さればバックルの考へたやうに『道德情操論』に於ては單に人性の同情的部分を研究し、『國富論』に於ては其の利己的部分を研究した（註、四）もの即ち別々の動機が別々に働くことを示さうとしたものであるのではなくして、實はこの兩著は其の根本思想に於て互に相容れる所あるものと云はなければならない。

註、一　Jodl, Gesch.chte der Ethik. S. 650. Anmerkung 68

註、二　Encyclopaedia Britannica. 11th Edit. Smith, A の章參照

註、三　Jodl, Geschichte der Ethik. S. 377 ff.

註、四　Buckle, History of Civilization in England New Edit. 1869. Vol. III Pp. 304-305.

二

『道德情操論』に現れてゐるアダム・スミスの倫理思想なるものは、倫理史家ヨードルも云つてゐる通り、（註、一）哲學的倫理學の長い發展の終極點に立つてゐるものであつて、すぐ前に存してゐる思想を二三の點に於て推し進め得たに過ぎない。アダム・スミスの傳記を見ると、渠は十四歲にしてグラスゴー大學に入り、スコットランドに於ける近代思辯哲學の始祖と呼ばれたハチソンの講義を聽きて感發する所あり、主として其の影響を受けて心を倫理的思辯に寄せるやうになつたと云はれてゐる。それから十七歲にしてグラスゴーからオックスフォードに送られ七ヶ年間在學したと云ふことであるが、其の間の生活に就ては殆んど知られてゐる所がない。けれども、唯、一つ逸話が殘つてゐる。其の逸話と云ふのは、アダム・スミスがバリオル・コレッジの自分の室でヒュームの『人性論』を讀んでゐる所を目付かつて、それを沒收され、譴責を受けたと云ふことである。此の逸話の眞僞如何は明かではないが、兎に角かゝる逸話の存してゐる所を見ても、コレッジ時代に於ける渠の精神的傾向が、略、推され得るやうに思はれる。而してそれがまた『道德情操論』に於て現れてゐると見ることが出來るのである。そはいづれにしてもアダム・スミスの倫理思想なるものは直接には主としてハチソンとヒュームとからして享けて來て之を發展さしたものと云ふことが出來やう。

一體、アダム・スミスは道德の根本原理を以て同情に基づけたのであるが、これは要するにハチソンの仁愛とヒュームの同情とからして脫化し來つたものに他ならないやうに思はれる。アダム・スミスは『道德情操論』第六卷（パート）に於て、德を以て仁愛に在りとする系統を論じて、ハチソンに就てから云つてゐる。『此の系統の古代若くば近代のあらゆる贊成者の中で、故のハチソン博士が、疑もなくあらゆる比較を超へて、最も鋭い、最もはつきりした、最も哲學的な、してすべての中で最も重要な點であるが、最も眞面目な而して最も思慮あるものであつた』（註、二）と。これを見てもアダム・スミスが如何にハチソンに傾倒してゐたかゞ分かる。それから同情を

以て道德上の原理とする説に就ては渠はかう云つてゐる。『自分が打建てようと努力してゐた系統とは別な、吾々の道德情操の起原をば同情からして説明しようとする今一つの系統がある。それは德なるものを、功利に置き、而して傍觀者の懷く所の快樂をば、それに由つて感動せしめられる者の幸福と同情する所から起つて來る何等かの性質の功利であると説明する所のものである。此の同情なるものは吾々がそれに由つて行爲者の動機に同感する同情とも異つて居れば、又、其の行爲の恩惠を受ける人々と其の感謝を共にする同情とも異つて居る。それは吾々が立派な考案になる機械を稱賛する場合に於ける原理と同樣な原理である。然し如何なる機械も上述の二つの同情の孰れの對象なることも出來ない。』（註、三）と。此處に云ふ所の同情説なるものは即ちヒユームの同情説を指したものに他ならない。蓋しヒユームは『人性論』に於て到る處に同情なるものを説いてゐるのであるが、渠は云ふ。『同情なるものは人性に於ける甚だ有力な原理であり、吾々の美的趣味の上に大なる影響を有し、あらゆる人爲的德に於ける吾々の道德情操を生ずるやうに思はれる。それから吾々はまたそれが他の多くの德を惹起し、人類の爲になるべき傾向のある所から性質は吾々の稱讃を得るものなる事を推定することが出來る。して吾々の自然に稱讃する性質の多數は實際さう云ふ傾向を有し、人をして社會の正當な一員たらしめる、然に吾々の自然に非難する性質は反對の傾向を有し、さう云ふ性質を有する人との交際は危險であり、若くば不愉快であると云ふことを見出す時には、其の推定は確實とならなければならない。蓋しさう云ふ傾向が道德の最も強い情操を生ずるに足る力を有して居ると云ふことが分つたならば、德及び不德の場合に於て、稱讃若くば非難に就て何等か別の原因を覓めると云ふことは、道理あることとは云はれない。何故かと云ふと、何等か特殊な原因が一結果を生ずるに足る場合には、吾々はそれで以て滿足してゐて、必要のないのに原因を殖すべきではないと云ふのが、哲學に於ける犯すべからざる格言であるからである。吾々は幸にして人爲的德に於て實驗を遂げた、而して人爲的德に於ては、社會の爲になると云ふ、性質の傾向が吾々の稱讃の唯一の原因であつて、他の原理の協力の存してゐると云ふ少しの疑もない。そこからして吾々は其の原理の力あるものであることを知るのである。而して其の原理の起り得る

場合であつて、而も稱讃された性質が實際社會に取つて有益である場合には、眞の哲學者は最も強き稱讃と尊敬とを說明するが爲に決して何等か別の原理を要求しないであらう』（註四）と。勿論、アダム・スミスは、ヒユームのそれの如き、同情なるものの客觀的方面の考察だけでは滿足が出來なかつたことは其の言に徵して明かである。けれども渠は同情なるものゝ考察に於て、ヒユームから出發して之を深め、而して其の主觀的方面を補足したものと云ふことが出來やう（註五）。いづれにしても『道德情操論』に現れてゐるアダム・スミスの倫理思想なるものは、既に前にも云へるが如く、直接にはハチソンとヒユームとに負ふ所尠からざるものと云つてよからう。

然るにアダム・スミスの『道德情操論』に現れてゐる思想を以てポリビウスから假り來つたものであるとする說がある。アリストートルの倫理學及び政治學の譯者たるギリース博士の說が即ちそれである。ヂュガルド・スチューワートに據ると（註六）ギリース博士はポリビウスの言を援いて、アダム・スミスは之を推擴め而してポリビウスが正邪の觀念を以て、理性即ち知性の、感情若くば欲求の上に作用する所から起つて來るものと爲したに反して、之を以て單に情操によつて知覺されるものと考へたと云ふのである。ポリビウスの云ふ所は要約するとつまりかうである。

恩を受けた者がそれに報いるに惡を以てするのを見ると云ふやうな場合に於ては、他の動物と異つて理性の能力を與へられてゐる人間は、之を看過することは出來ない。それで人間は自分の見る所のものに對して反省を加へ、自分もまた何時かはさう云ふ取扱を受けることのあるべきを思ひ憤慨の心を起すに相違なからう。すべての人が隣人の憤志に對するに同情により、自分等もまたさう云ふ目に遇ふことのあるべき危懼からしてこれに對して愕然たらざるを得ないのは慥である。かう云ふ所からして何人の心にも正義の觀念が起つて來るのであると。

無論ポリビウスの說いた所はアダム・スミスの思想と似通へる所はある。然しヂューガルド・スチューワートも云つてゐる通り、恐らく暗合と見るべきものであらう。それで『自分はアダム・スミスが著述をしてゐる場合に、それが記憶に上つたならば、屹度自から其の事を述べて居るであらうと思ふ』（註七）。と、スチューアー

トの云つてゐる所は、何人も承認するであらう。

註、一　Jo ll, Geschichte der Ethik. S. 377

註、二　Smith, The Theory of Moral Sntiments. New Edit. by Dugald Stewart. p. 441.

註、三　Ibid. p. 481.

註、四　Hume, A Treatise on Human Nature. Edit by Green and Grore. vol. II PP. 337-338

註、五　Wundt, Eth. 2. Aufl. S. 336. 參照

註、六　Dugald Stewart, Account of the Life and Writings of Adam Smith. in "The Theory of Moral Sentiments" p. 31-32.

註、七　Ibid. p. 33

三

以上に於て『道德情操論』と『國富論』との關係及び『道德情操論』に現れるてゐる倫理思想の淵源を尋ねて一言したからして、これより進んでアダム・スミスの倫理思想其の物の內容を略叙しなければならぬ。

アダム・スミスは『道德情操論』に於て、第一卷（パート）にては行動の適否（ブルプライエー）に就て論じ、第二卷に於ては功過（メリットエンドデメリット）、即ち賞罰の對象に就て論じ、第三卷にては吾々自身の情操及び行爲に關する吾々の判斷の基礎と本務の感とに就て論じ、第四卷にては稱讃の情操に於ける功利の結果に就て論じ、第五卷にては風習及び時好の道德的稱讃及び非難の情操に於ける影響に就て論じ、第六卷にては道德哲學の系統に就て論じたのであるが、其の根本思想を略說すると次のやうになる。

人間なるものは如何ほど利己的のものと想像することが出來るにしても、其の性質の中には他人と同じく感ずると云ふ原理が明かに存してゐる。が、吾々は他人の感ずる所のものを直接に經驗することは出來ない。それで自身をば他人のそれと同じ境遇に移して、さうして起る所の感じを知るの他はないのである。所で、他人の境遇に自身を移すと云ふことは常に起る事實である。かう云ふやうに、他人の境遇に自身を移し、他人の情に關與せしめる吾々の性質の原理をばアダム・スミスは同情と名づけたのである。而して同情に於ては同情する者も同情される者も共に快感を感ずるのである。それから後者の感情が前者の感情と全く調和する場合には前者は後者の感情を以て其の事象に適合してゐるものであるとなし、然らざる場合には其の事象に適合してゐないものとする。それで他人の感情を以て、其の事象に適合してゐるとすると云ふことは、吾々がそれと全く同情

すると云ふことに他ならないし、其の事象に適合してゐないとすると云ふことは、吾々がそれと全く同情しないと云ふことに他ならないのである。で、他人の感情の適否はそれを惹起する所の事象に適合するや否やによつて定まるのである。而してそれが事象と適合するや否やは、一に自分が他人の境遇に自分を移した場合に起る所の感情と一致するや否やによつて定まるのである。

吾々が他人の境遇に自分を移す場合には、其の人の感ずると同じ性質の情緒が自然に吾々の心に起つて來るとは云ふものゝ、其の度合に至つては、同情的情緒は原情緒には及ぶべくもないのである。そこで相互同情の快樂を得るが爲に、自然は傍觀者をして出來るだけ其の情緒をば事象の實際生起する情緒と對等となるやうに引上げしめ、又、それと反對に當の人をして出來るだけ其の情緒をば傍觀者のそれと對等となるやうに引下げしめる。『よしから云ふ二つの情緒は決して同音となりはしないけれども、調和音たることは出來る。而してこれが必要とせられ要求せられるすべてである』（註、一）とアダム・スミスは云つてゐる。傍觀者が當の人の境遇に自からを移して其の情操を同じやうに感じようとする努力と、而して當の人が傍觀者の共に感じ得る程度に其の情緒を引下けようとする努力とに基いて德の二種類が生じて來る。前者が慈愍、仁愛の如き愛すべき德であり、後者は克己、自制の如き尊敬すべき德である。

アダム・スミスは稱讃、非難の對象たる吾々の有する適否の感を種々に分析した後、進んで報賞、責罰を受くべき性質たる功過の感を論じてゐるのであるが、これも其の起原を説明するに方つてはやはり同情の原理を利用してゐるのである。既に前にも説明した如く、適否と云ふ語は感情のそれを惹起す所の原因に適合するや否やを表してゐるのであるが、功過と云ふ語は感情の生ずべき結果に關係してゐるのである。で、感情が惹起すべき傾向が有益である時には、さう云ふ感情からして起つて來る所の行動は賞せらるべき價値あるものであり、其の傾向が有害である時には、さう云ふ感情からして起つて來る所の行動は賞せらるべき價値なきものである。而して吾々を驅て最も直接に報賞せしめようとする情操は感謝であり、吾々を驅つて最も直接に責罰を加へしめようとする情操は憤恚である。それで當然感謝の對象たるやうに思はれる行動は吾々に取つては報賞に値して

ゐるものと思はれ、當然憤悲の對象であるやうに思はれる行動は責罰に値してゐるやうに思はれるに相違ない。而してそれが當然感謝の對象となり、憤悲の對象とならうと云ふには、さうあるべきものと認められなければならないのであるが、それは即ち公平な傍觀者は誰も全くそれに同情し、同感すると云ふことに他ならない。

相當な動機から出て來る有益な傾向の行動だけが、報賞を要求するやうに思はれる。何故かと云ふと、さう云ふものだけが是認された感謝の對象であるからである。即ち傍觀者の同情的感謝を起さしめるものであるからである。それから不相當な動機から出て來る有害な傾向の行動だけが責罰に値してゐるやうに思はれる。何故かと云ふと、さう云ふものだけが是認された憤悲の對象であるからである。即ち傍觀者に同情的憤悲を起さしめるものであるからである。

正義の感もアダム・スミスは同情の原理で以て說明する。渠は云ふ

『縱し何人でも皆自分の胸中に於ては、當然自分をあらゆる人間よりも重んずると云ふことは眞理であらうけれども、それにしても面と向つて自分はかう云ふ原理に從つて行動すると公言する勇氣のあるものではない。さう云ふやうに自分を重んずる場合には、他人は自分と同感することが出來ない、而してそれが自分に取つてはいか程當然の事であるにしても、他人には何時でも過度であり、法外であると見えるに相違ないと云ふことを感ずる。……若し公平な傍觀者が自分の行爲の原理に同情することの出來るやうに行動しようとするならば――あらゆる事に就てさうしたいと云ふ最大の欲求を有してゐる――何人も皆あらゆる他の場合に於けると同じやうに、此の場合に於ても、自分の自愛の尊大を低くめて、他人の同感することの出來るものに引下げなければならない。……富、名譽、及び昇進に對する競走に於て、あらゆる競爭者を乘越す爲に、出來るだけ骨折つて駈け、いづれの神經、いづれの筋肉も皆緊張さして差支ない。けれども若し競爭者の何人でもを擠したり、若しくば倒したりするならば、傍觀者の寬大は全く終りを告げて了ふ。これ尋常な勝負を破るのであつて、傍觀者の許すことの出來ない所のものである。傍觀者に取つては、誰も彼も同じである。彼等は他人を害して勝を占めようと云ふやうな自愛に同情し、而して其の動機と同感することは出來な

い。それで彼等は害を受けるものゝ當然な憤恚とすぐに同情する。而して害を加へた者は彼等の憎惡、憤慨の對象となる。害を加へた者はさうなると云ふことを心づいて居り、而してさう云ふ情操があらゆる方面からして自分に對して破裂しさうであると云ふことを感ずる』（註、二）と

吾々が若し情の爲に動かされて前に述べたやうな關係を忘れて了ひ、而して公平な傍觀者の感情を無視して、自分自身の感情に從つて行動するやうな場合には どうしても悔恨の責罰を受けなければならない。自分の情が充され而して冷靜に自分の行爲を反省し始めると、最早其の行爲の出て來た所の動機に贊成することは出來ない。そこで其の行爲は他人に不適當な行爲であると見えると同じやうに、自分にもさう見えるやうになり、其の行爲の生じた結果を悼み、害を受けた人を氣の毒と思ひ、自分をば正しくあらゆる人々の憤慨の對象だと感ずるやうになる。これが悔恨と呼ばれる情操の性質であるのだ。それでアダム・スミスは云ふ。『悔恨なるものは過去の行爲の不當であつたと云ふ感じからの慚愧と、其の結果に對する憂愁と、其の害を受けた人に對する憐憫と、あらゆる理性的なものゝ當然な憤恚の意識からの責罰の心配及び恐怖から成つてゐる』（註、三）と。之に反してそれと反對の行動は當然反對の情操を生ぜしめるのである。で、若し人が適當な動機からして義俠的行動をなすやうな場合には、其の行爲を受けたものに取つて、自分が其等のものの、愛と感謝の當然な對象であると感じ、それから、又、それ等のものとの同情によつて、あらゆる人間の尊敬と賞讃の當然な對象であると感ずるのである。それから、次に其の行爲の出て來た所の動機を振返かつて見て、而して之を公平な傍觀者の眼で以て調べる時には、尙、引續いてそれに贊成し、想像された公平な批判者の賞讃との同情によりて自分をば稱揚するのである。報賞を受くべき價値ありとの意識はかう云ふ情操の結合から成つてゐる。

これ迄は主として他人の情操及び行爲に關する吾々の判斷の起原及び基礎の考察であるが、自分の行爲を稱讃し若くば非難する場合に於ける原理もそれと別に變りはない。

一體、吾々の道德上の批判はまづ始めに他人の品性及び行爲に對して行はれるのである。これは丁度、容貌の美醜の最初の觀念が自分の容貌の美醜からではな

くして、他人のそれから生じて來るのと同樣である。が、それからして自然に自分自身の情及び行爲を調べることになる、而して自分自身の行爲を調べて、それに判定を下さうとする時には、何時でも自分をばいはば二人に分けるのである。即ち審問者、批判者たる我と、其の行爲の審問せられ、批判せられる我とである。前者は傍觀者である、而して自分自身の行爲に就て其の傍觀者の情緒に同感しようとするのである。後者は傍觀者たる資格を有する我が、其の行爲を判定しようとする、本當に我と云はれる所のものなのである。前者は批判者であり、後者は批判せられる人であつて、自から異つてゐる。かくてアダム・スミスは云ふ。『して批判者がどんな點からもすべて結果と同一であると云ふことは、原因がどんな點からもすべて結果と同一であると云ふのと同じく不可能である』（註四）と。かくの如くしてアダム・スミスは『內の人』――the man within――としての公平な傍觀者と云ふ考に進んで行つたのである。渠は云ふ。『かくの如く人は人類の直接な裁斷者と、創造者によつてなされたけれども、それは、唯、第一審に於てだけであつて、其の判決からして一層高い法庭、彼等自身の良心、想像上の公平にして賢明な傍觀者、彼等の行爲の大裁判官、裁斷者たる胸中の人の法庭に上告せられる。さう云ふ二つの法庭の裁判權はある點に於ては似寄つたものであり、同系統のものであるけれども、然し實際に於ては異つた別な原理に基づいてゐるのである。『外の人』――the man without――の裁判權は全く實際の稱讃の欲求と實際の非難の嫌厭とに基づいてゐる。『內の人』――the man within――の裁判權は全く稱讃に値したるものゝ欲求と非難に値したるものゝ嫌厭とに基づき、他人に於て吾々の愛し欽仰する性質を有し、さう云ふ行動を爲さうと云ふ欲求と他人に於て吾々の憎み侮蔑する性質を有し、さう云ふ行動を爲すことの恐怖とに基づいてゐるのである。若し『外の人』が吾々の爲さなかつた行動の爲か、若くば吾々の上に影響を及ぼさなかつた動機の故に吾々を喝采するならば『內の人』はさう云ふ理由のない喝采を受くべき筈のものではないのであるから、それを受けるのは自からを陋劣なものにするのだと云ふことを吾々に談つて、ともするとそれから起ることのあるべき自負とつけあがりとを直ちに挫く力があるのである。之に反して若し『外の人』が吾々の爲さなかつた行動に對してか、或は吾々の爲すことの出來た行動に何等影響を有さ

なかつた動機に對して、吾々を非難する場合には『內の人』は直に其の間違つた判斷を訂正して、吾々はさう云ふ不當に加へられた非難の眞の對象と、決してなるものではないと云ふことを吾々に保證することも出來るのである（註、五）。とにかくアダム・スミスの倫理觀に於ては、何時でも『公平な傍觀者』の判斷に訴へられるのである。『內の人』の判斷に訴へられるのである。

アダム・スミスは既に前に一言した通りヒユームの說いたやうな、利得を受ける者の境遇に自からを移してそれに同情すると云ふ考へには反對したのである。けれども、それが爲に功利の原理をば全く棄てゝ了つたのではない。渠は、唯、功利を以て賞讃、非難の情操の第一の源泉とすることに反對したに止つてゐるのである。これは渠の次の言明によつて明白である。

『……渠は、心の如何なる性質も當人か若くば他人に有用であるか、或は快適であるが如きものゝ外は有德なものとして稱讃されないし、反對の傾向を有するが如きものゝ外は不德なものとして非難されないと云ふが、實に自然は、賞讃、非難の吾々の情操をば、最も嚴密な檢討の後にこれが一般に事實であることの見出される程旨く、個人並に社會の都合のいゝやうに按排した。けれどもなほ自分は、吾々の賞讃及び非難の第一の源泉であり、將又主要な源泉である所のものはかう云ふ功利若くば有害の見解ではないと云ふことを斷定する。疑もなく、之等の情操はから云ふ功利若くば有害からして結果する所の、美或は醜の知覺によつて、高められ、又、引立てられる。しかもなほそれ等が本來本質的に功利若くば有害の知覺とは異つてゐるものであると云ふことを主張する』（註、六）と

アダム・スミスは感情道德のスコットランドに於ける最初の辯護者たるハチソンの學說の影響を受けて來たのであるからして、道德生活を以て其の根柢に於ては感情に基づくものとしたには相違ないけれども、然し理性を全く排斥して了つたのではない。それでアダム・スミスは云ふ。

『德なるものが理性との一致に存すと云ふことは、ある點に於ては眞である、而して此の能力は、ある意味に於ては、賞讃並に非難、及び正邪に關するあらゆる確實な判斷の源泉、原理として考へられるも至極尤なことである。吾々がそれによつて吾々の行動を律すべき正義の一般的規則を發見するのは理性によつてゞある。…

……道德の一般的格言はすべて他の一般的格言と同じやうに經驗及び歸納から形成せられる。吾々は特殊の場合の種々樣々な中に於て何が吾々の道德能力を喜ばし、若くば何がそれに不快の感を與へるか、道德能力の賞讃し、若しくば非難するのは何物なるかを觀察し、而してさう云ふ經驗からの歸納によつて、それ等の一般的規則を打建てるのである。して、歸納なるものは理性の作用の一として常に考へられてゐる。それで理性からしてすべてそれ等の一般的格言及觀念を引出して來ると云つていゝ。それから吾々の道德判斷なるものが、健康や氣分の狀態の變るに從つてそれ程本質的に變化することの出來る、直接な情操や感情のやうな幾多の變形を容す所のものに全く由つて居れば、非常に不確かに當にならぬものとなるであらうが、さう云ふ吾々の道德判斷の大部分を調節するのは理性によつてゞある。それで正邪に關する吾々の最も確實な判斷は、理性の歸納からして引出された格言及び觀念によつて調節されるのであるからして、德なるものは、理性の能力が賞讃及び非難の源泉原理として考へられ得るかぎり、理性との一致に存すると云つてもいゝ。

が、理性なるものは、道德の一般的規則の源泉であり、それに由りて吾々の形成するあらゆる道德判斷の源泉であるには相違ないけれども、正邪の最初の知覺が、一般的規則の形成せられるやうな、經驗に於ける特殊の場合に於てすらも、理性からして出て來るものと想像すると云ふことは、全く背理不可解な事である。之等の最初の知覺、並に凡そ一般的規則の基く所のあらゆる他の實驗は理性の對象たることを得るものではなくして、直接な感じ及び感情の對象である。吾々が道德の一般的規則を形成するのは、種々樣々な場合の中に於て、行爲のある方針が常にある工合に心を喜ばしめ、又、あゝ他の方針が常に心に不快を與へると云ふことを見出すことに由つてゞある。が、理性なるものは、何等かの特殊な對象をして、其の物の爲に、心に快きものならしめ、若くば快からざるものたらしめることが出來ない。それは此の對象が、當然愉快なものか或は不愉快なものかいづれかである、ある他のものを獲る手段であると云ふことを示すことは出來得る。而してかくの如くして、他のあるものゝ爲に、その對象を快きものたらしめ、若くば快からざるものたらしめることを得るのである。が、直接な感じと感情とによつてにあらずば、何物

もその物の爲に、快きものたり、若くば快からざるものたることは出來ない。それで若しどの特殊な例に於ても、德なるものが必然にそれ自身の爲に心を喜ばしめ、而して不德がやはり確に心に不快の感を與へるならば、かくの如く吾々をして一方に和せしめ、而して他方より遠からしめるものは、理性であることは出來ずして、直接な感じ及び感情である。

快樂と苦痛とは欲求嫌惡との大なる對象である。が、之等は理性に由つて區別されずして直接な感じ及び感情によつて區別せられる。それで德がそれ自身の爲に欲求せらるべきものであり、不德が同樣に嫌惡の對象であるならば、さう云ふ種々の性質を本來區別する所のものは理性たることは出來ない、直接な感じ及び感情である。

けれども理性なるものはある意味に於ては、正しく賞讃及び非難の原理として考へることが出來るのであるからして、之等の情操は不注意よりして、古くから理性の能力の作用から本來流れ出て來るものと考へられたのであつた。ハチソン博士は幾分精確に、如何なる點に於て、すべて道德上の區別が理性から起つて來、如何なる點に於て、直接な感じ及び感情から起つて來るものと云つてよいか、と云ふことを明にした最初の人たる功績を有してゐた云々』（註、七）と。

アダム・スミスが道德生活に於て理性なるものゝ作用をば如何に考へたかと云ふことは、以上の言に徵して明白であつて、殊更に言辭を費すの必要を見ない。ともかくもアダム・スミスは道德生活に於ける正邪の最初の知覺を以て感情に基づくものと見、道德の一般的規則、其の一般的規則によつて形成せられる所のあらゆる道德判斷を以て理性の作用に基づくものと見たのである。されば吾々の道德判斷の訴へられる所の『公平な傍觀者』たる『內の人』の如きも、感情上の事實に基きて、理性によつて形成せられたものと見なければなるまい。

註、一　Smith, Theory of Moral Sentiments. p. 23
註、二　Ibid.　p. 120
註、三　Ibid.　p. 122
註、四　Ibid.　p. 165
註、五　Ibid.　pp. 185-186 參照
註、六　Ibid.　pp. 270-271

註、七　Ibid. pp. 469-471

四

以上で、アダム・スミスの『道德情操論』に就て述ぶべきことは大體述べたやうに思ふ。をこでそれに現れてゐる思想內容に一言の批判を加へて、此の小論文を結ばう。

一體、アダム・スミスは『道德情操論』に於て、道德判斷の成立する過程を明かにしようとした、換言すると、渠は道德の考察に於て所謂心理的方向を採つたのである。長所も玆に在れば、短所も玆に在る。實にヴントの云つてゐる通り（註、一）ヒュームによつて始められた道德の心理的分析が、渠によつて、當時の心理學の狀態に取つては驚嘆すべき巧妙さを以て終極まで進められてゐる。然し心理的分析なるものは、道德の時間的經過の方面を明かにするには足るけれども、其の妥當性を基礎付けるには適しない。で、アダム・スミスの『道德情操論』に現れてゐる所は、『ある所のもの』の分析だけであつて、其の『あるべき筈のもの』には及んでゐない。精々の所、存在に於ける其の始めを顧慮したに過ぎない（註、二）從つて『公平な傍觀者』の如きも單に道德生活に於ける事實として措定されてゐるに止まつてゐて理想としてそれが十分に基礎付けられてはゐない。是れ主として現實なるものの分析家たる渠に取つては止むを得ないことであるのであらう。然しアダム・スミスが吾々の道德判斷なるものは、個人的見地よりも一段高い見地のある關係を含んでゐるものであると云ふ事實を明かにしたのは注意すべきことである。唯渠が今一歩を進め得ざりしを遺憾とするのみである。

アダム・スミスの倫理思想は其の後大陸に於て、ヘルバルトにより、又、フランツ・ブレンターや其の學徒によつて開展せしめられた（註、三）。のみならず渠の本國に於ても、近時、自我實現の倫理說を主張する人達の自我の觀念の中には、渠の『公平な傍觀者』が、其の形を變へてなほ生きてゐるとも云ふことが出來やう。倫理學者としてのアダム・スミスもまた偉大たるを失はない。

註、一　Wundt, Ethik S. 338 參照
註、二　Jodl, Geschichte der Ethik. S. 369 參照
註、三　Scheler; Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik. S. 182-183. 參照